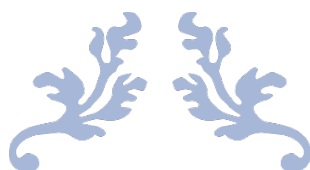

ティーチング・ポートフォリオ



臨床に強い薬剤師の養成を目指して Ver.4



湘南医療大学薬学部

加賀谷 肇

湘南医療大学 ティーチング・ポートフォリオ（改訂案）

大学名：湘南医療大学 所属：薬学部 医療薬学科

氏名：加賀谷 肇 作成日：令和 8 年 5 月 1 日

1. 教育の責務と担当科目

薬学部開設以来、以下の科目を担当してきた。

- 薬学入門Ⅱ（薬と病気の科学）：必修・1 年前期
- 早期臨床体験実習：必修・1 年前期
- 医療薬学チュートリアル演習Ⅰ：必須・1 年後期
- 調剤学：必須・3 年後期
- 臨床栄養学：選択・4 年前期
- インターンシップ実習：選択・4～6 年次
- 実務実習事前学習Ⅰ～Ⅲ：必須・3 年後期～4 年後期
- 薬物治療学Ⅴ：必須・4 年後期
- 後期臨床体験実習：必須・5 年後期
- 腫瘍生物学：選択・6 年前期
-

また、入学前教育および入学後オリエンテーションにおいて、本学の特徴である **臨床一貫型教育** を紹介し、「臨床に強い薬剤師の育成」という教育理念を学生に示している。

導入教育では、もしバナゲームやワールドカフェ方式の対話を通じて、コミュニケーション能力や医療観の形成を促している。さらに、病院薬剤師の業務紹介やキャリア支援に関する講義も担当している。

学務分掌

- 入試委員会
- 共用試験実行委員会
- 実務実習委員会
- キャリア支援委員会

大学入試、薬学共用試験（OSCE）に向けた学内準備、5 年次の病院・薬局実務実習に向けた環境整備を進めている。また、4 年次からは、選択科目「インターンシップ実習」では、3・4 年生の参加が増加しており、今後は進路・就職支援との連携強化が重要な責務であると考えている。

2. 私の理念・目的

（1）教育理念

従来の薬学教育は創薬を中心としたサイエンスベースの教育が主流であった。しかし、現代の医療現場が求める薬剤師は、薬物療法に関する情報提供、モニタリング、指導を通じて患者・医療者にフィードバックできる能力を備えている必要がある。

そのため、サイエンスに加えて、コミュニケーションを軸とした“アートのマインド”の醸成が不可欠である。

薬学教育の課題として、医療を教える臨床系教員が少ない点が挙げられる。私は長年の病院薬剤師としての経験から、「臨床は臨床に始まり臨床に帰す」という姿勢を教育の根幹に据えている。

本学は臨床系教員が5割を占めるという強みを持ち、「臨床に強い薬剤師の養成」という新しい薬学教育のコンセプトを実現できる環境にある。学生には、将来ライフサイエンスの専門家として多様な分野で活躍することを期待している。

(2) 理念を持つに至った背景

1975年の大学卒業後、新設医学部の大学病院に薬剤師として就職した。当時の大学病院は「患者中心の医療」を掲げ、チーム医療の実践を目指していた。

1987年には薬剤部の臨床業務開発プロジェクトリーダーとして、全国に先駆けて病棟薬剤師業務を確立し、薬剤管理指導業務が保険請求可能となる制度化にも寄与した。

1989年にはメディカルスタッフとして初めて海外留学が認められ、米国ミシガン大学病院・ケンタッキー大学病院で臨床薬学と栄養管理チームの実地指導を受けた。帰国後は地域中核病院の薬剤部長として臨床薬剤師育成と病院経営への貢献に取り組み、38年間病院薬剤師として研鑽を積んだ。

その後、母校の臨床薬学教授として6年間教育に従事し、本学薬学部を設置準備から開設後5年間の教育に携わってきた。これらの経験から、医療現場と薬学教育が密接に連携することこそが、臨床に強い薬剤師を育成するための基本理念であると確信している。

3. 教育の方法・戦略

薬学部では、学位授与方針の達成に向け、以下の方針で教育課程を編成している。

(1) 体系的なカリキュラム構成

- 低学年では導入教育・一般教育科目・早期体験学習を配置し、段階的に専門性を高める構造とした。
- 臨床一貫型教育を実現するため、基礎系・臨床系教員が連携するチューター制度を導入し、教育の方向性を統一している。

(2) 知識・技能・態度の統合的育成

- 高度な専門知識に加え、倫理観、人間形成、コミュニケーション能力、課題発見・問題解決能力の育成を重視している。
- 対人教育を重視し、全学年を通じて人間性の涵養を図っている。

(3) 学修成果の評価

- 小テスト、試験、レポート、実習評価などを組み合わせ、シラバスに基づいて評価する。
- 授業評価アンケートを活用し、教育改善に反映している。

私自身の取り組み

- ・ 講義中に 10 題の問題を組み込み、解説を通じて課題解決能力を育成している。
- ・ レポート課題の添削指導を行い、思考の深化を促している。
- ・ 3 年後期以降の本格的な講義・実習では、学生の理解度を見極めながら教育方法を改善していく。
- ・ 生涯学習講座や学会参加を通じて自己研鑽を促す教育を行う。
- ・ 実習や卒業研究での後輩指導を通じ、後進育成の姿勢を培う。

4. 学習成果

学修成果は、成績評価規程およびシラバスに基づき評価し、アンケート結果を教育改善に活用している。

具体例：

1. **臨床に強い薬剤師の育成意欲の醸成** 入学前教育やミニレクチャーで自身の臨床経験を共有し、学生の感想文・コメントから成果を評価している。
2. **教育成果の学会発表** 日本薬学教育学会において、基礎系・臨床系教員との共同研究として毎年発表を行っている。
3. **教育実践の論文化** 本学薬学教育の歩みを論文としてまとめ、外部に発信している。

5. 改善のための努力

1. **事前実務実習の改善** 人的・設備的課題を会議で共有し、薬局・病院実習に向けて職能団体や実習施設と調整を進めている。
2. **臨地教育の質向上** 指導薬剤師と連携し、今年度からグループ病院 6 施設で教員による臨地教育を実施する。

6. 今後の目標

プロジェクト学習、ポートフォリオ、コーチングは「意志ある学び」を実現する新しい教育手法として注目されており、薬剤師の新たな役割拡大にも寄与すると期待される。

1. **短期目標** 2025 年度の OSCE 試験では全員合格を達成した。2026 年度も継続して全員合格を目指す。
2. **実務実習の充実** グループ病院実習施設・保険薬局指導薬剤師との連絡会を定期的に開催し、実習の質向上を図る。